2. 日本人のルーツと Iron Road　の接点を求めて

『弥生人の源流を探る　=西から東へ=』

japanprint.htm

1. 山口県土井が浜弥生遺跡　と　「土井が浜シンポジューム」

1.1.　土井が浜弥生遺跡　& 人類学ミュージアム　dhmprint.htm
1.2.　『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨』　dhm2print.htm
1.3.　長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認　dhm3print.htm
日中調査団　ルート論争に一石

2. 日本人のルーツ渡来系弥生人の源流をもとめて　roots1print.htm

3.『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』　roots2print.htm

4. 古代日本と中国・朝鮮の交流　鉄の伝来　gaya1print.htm

5.『ヤマタノオロチを退治した
スサノオノミコトは朝鮮からやってきた』　susano1print.htm

6. 出雲と朝鮮新羅の関係
日本誕生とたたら　歴史雑感　susaprint.htm

1．土井が浜弥生遺跡 & 人類学ミュージアム

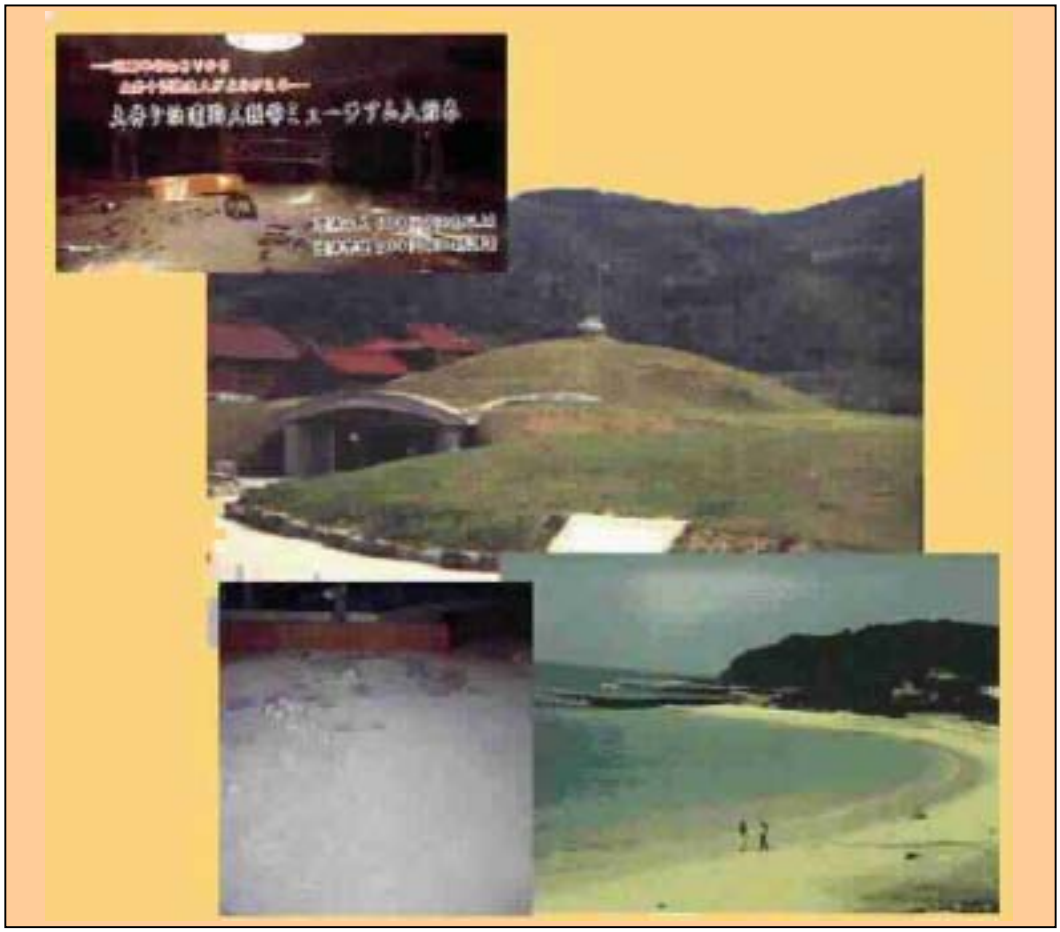
【　土井が浜　弥生パーク　】

山口県豊浦郡と豊北町

dhm.htm by M.Nakanishi 1999.5.3.

1.1. 土井が浜　人類学ミュージアム

土井ヶ浜遺跡は、遠い 2000 年の昔 日本の歴史を考える国立の史跡公園です。
この日本海を臨む浜辺の丘の上には、300 体を超える弥生人骨が整然と
並んで埋葬・出土した非常に貴重な集団墓地遺跡です。



この多くの弥生人骨は、日本人の起源を考えるうえで、また、埋葬の在り方は弥生人の生活を知るうえで大変重な資料を提供しています。
この土井が浜人類学ミュージアムでは　中国の研究者達と共同研究が行われる一方毎年人類学シンポジュームが開催され、この渡来系弥生人のルーツ調査が行われています。

【土井が浜　人類学博物館ドームの内部】

発掘された状態でドームがかけられ内部が見学できます

その結果、ここから出土した弥生人の人骨は、中国内陸部の黄河・長江に挟まれた地帯から出土する人骨とよく似ている事が、発見され、弥生人のルーツの一つがこの地方にあることが判りつつあります。

【土井が浜渡来系　弥生人と縄文人の顔骨格の相違】

縄文･弥生の時代を超えて、大陸から多くの人が渡来し、数々の文化を伝え、この日本を形作ってきました。2000 年前の昔中国春秋戦国の動乱の中、大陸から渡来し、日本人として生涯をとじた渡来人達が、望郷の念を抱きつつ海をへだててはるか遠い故郷の方向をじっと眺めつつ、この丘で今も眠りについている。
北九州・山口地方の渡来系弥生人のルーツが土井が浜弥生遺跡です。

、

参考資料　　第６回　土井ヶ浜シンポジューム　講演資料より

1.2.『中国青海省の青銅器時代人骨と弥生人骨（予報）』

松下孝幸　・　韓康信

1998.6.30.　土井ケ浜人類学博物館にて
dhm2.htm　1999.54.24.　　by M.Nakanishi 資料収録

私たち学際的共同研究チームは、土井ヶ浜弥生人など、縄文人的特徴をもたない弥生すなわち渡来系と呼ばれている弥生人のルーツを探るために、中国の研究者と共同研究をおこなってきた。
９４年から９６年までの山東省との共同研究で、山東省臨?から出土した周代末と漢代人骨が、北部九州や山口の弥生人骨によく似ていることが、明らになリ、北部九州・山口タイプの弥生人のおおもとは中国大陸にあると考えても差し支えない状況になリました。
しかし、私たちはこの事実から北部九州・山口タイプの人は山東省から来た、といってるわけではない。どこから来たかはまだわからないが、おおもとは大陵にあるといってもいいだろうと思っている。
これから先は「直接どこから、どのようなルートで、どこへ入ってきたか」という課題と「本当のルーツはどこか」という２っの課題で調査研究を進めていく計画である。
「本当のルーツはどこか?」 というのは土井ヶ浜弥生人や吉野ヶ里弥生人など日本では渡来系弥生人とよぱれている人々の形質は「どこまでさかのぽれるのか?」「中国大陸ではいつごろからこのような特徴をもった人々がどこに現れたのか?」という意味である。
山東省臨?では周代末からは確実にこのような特徴を示していましたので、おそらく周代までは確実にさかのぽれると私たちは考えている。
日本列島への渡来を考える場合は、目本人はよく北からとか南からとかいうが、中国でヒトの移動を考える場合は、西から東への流れを無視するわけにはいかない。
私は、黄河と揚子江の二大河川に沿ってヒトと文化が西から東へ移動したのではないかと、考え、まず黄河と揚子江の源流がある青海省の古人骨の特徴を調べてみることにした。
幸いなことに青海省からは保存状態のよい青銅器時代の人骨が多数発掘され、韓先生のご努力でそれらが保管・管理・整理されていた。
現在、私たちはこの人骨の研究をおこなっているが、人骨が多量なためにまだ彫塑途中なので、今年は研究の一部をご紹介したい。

第６回　土井ケ浜シンポジュ-ムにて

1.　弥生人の地域差

1.　北部九州・山口タイプ	1．顔が長い(顔の高さが高い) 2．鼻の付け根が扁平 3．高身長(男性　162～164　cm　　女性　150cm 程度)
２．　西北九州タイプ	1．顔が短い 2．眉上弓の隆起が強く、鼻骨が隆起し鼻根部が陥凹しており、ホリが深い容貌 3．低身長(男性　158cm 程度　　女性　148cm 程度) 4．風習的抜歯を行っている。
３．　南九州・南西諸島タイプ	1．著しい「低・広顔」（西北九州弥生人の特徴がさらに顕著） 2．強い「短頭性」（頭を上からみた形が円に近い） 3．著しい低身長　{男性 153～155　程度　女性　141～145cm 程度} 4，風習的抜歯を行なっている。

【弥生人と縄文人の頭骨の特徴と差】

<山口県土井が浜人類学ミュージアム>

2.　地域差が生じた理由

西北九州タイプ	・　縄文人の特徴と同じ ・　彼らは縄文人の子孫 ?
北部九州・山口タイプ	・　縄文人の特徴は見られない ・　彼は大陸からの渡来人か ?

３．中国大陸の２，０００年前の古人骨

山東省の臨?の漢代と周代の人骨は北部九州・山口タイプに酷似。

４．青海省青銅器時代人骨 資料 {頭蓋}

各人骨の所属時代は、? 約文化および辛店文化期の青銅器時代で、目本の縄文時代 後期に相当する。

上孫家	アハトラ山	李家山	合計
232	37	24	293

５．李家山頭蓋の特徴

・　頭型は中頭型。
・　顔の特徴は高さが高く、幅が狭い（高顔・狭顔）。
・　鼻根部は属平。

土井ケ浜弥生人や吉野ヶ里弥生人などの渡来系弥生人に酷似。

土井ヶ浜弥生人の形質的特徴の原形は青銅器時代までさかのぼる可能性が強くなってきた。

土井ケ浜の海岸丘で、遠く大陸へ続く日本海を眺めつつ眠る土井ケ浜人。
弥生人しいては日本人のルーツの集団の一つが、黄河・揚子江に挟まれた流域からやって来たらしい。
中国・朝鮮半島の多くの国の興亡の中　朝鮮海峡を渡り、日本にやって来た。
この弥生中期の土井ケ浜人が鉄を持ってきたかどうか?はまだ判っていない。
しかし　この道は日本へ数々の文化を伝えた本街道。
日本へ鉄を伝えた『　Iron Road　』も間違いなくこの道であつたに違いない。

１９９９．４．．２４　　神戸にて　　中　西

日本人の起源　シリーズ　1　土井が浜　弥生人のルーツ

1.3.　長江で『渡来系弥生人』の人骨初確認

日中調査団　ルート論争に一石

朝日新聞　１９９９年３月１９日朝刊より

choko.htm 1999.3.25

『大陸から稲作や金属器など弥生文化を伝え、現代日本人　の成立にも大きな影響を与えたとされる渡来系弥生人にそっくりな人骨を中国・長江（揚子江）流域で初めて確認した』と 3 月 18 日　日中共同調査団が発表

日中共同調査団

日本側団長、山口敏・国立科学博物館名誉研究員

中国側団長、鄭厚本・南京博物院考古研究所長

北方系とされてきた渡来系弥生人の故郷のひとつが長江下流域にもあったことをうかがわせる発見で、朝鮮半島経由ルートと江南ルートに分かれて諭争湖続く弥生文化の伝播をめぐっても大きな関心を集めそうだ。

中国・江蘇省の梁王城、胡場などから出土した古人骨を対象に、1996 年度から人類学者グループが南京博物院と調査を進めていたもの。

日本の弥生時代とその直前にあたる春秋戦国時代から前漢時代の人骨約二十体の頭がい骨や四肢骨、歯を計測。併せてＤＮＡも調べた。

その結果、北部九州や山口県で見つかる、背が高く面長でのっぺりした顔立ちの渡来系弥生人と姿形が酷似し、遺伝的にも近いことがわかった。

また、弥生時代にみられる抜歯の風習も確認された。

日本人の成立については、南方系とされる彫りが深く低身長の縄文人に、大陸北部の北方系の渡来系弥生人が混血したという見方が有力。九〇年代に入り中国では、黄河下流域の山東省や内陸部の青海省などでも渡来系弥生人に似る骨が確認されているが、長江下流域では知られていなかった。

山口団長は「稲作文化の中心は長江流域。渡来系弥生人を北アジア的とする通説に修正が必要ではないか」と話している。

近年、長江流域は、中国文明とは別に独自の高度な文明を持っていたとして注目を集めている。春秋戦国時代には呉・越や楚などの国が興った。畑作地域の華北とは異なる稲作圏であることから、稲作中心の弥生文化は直接ここから日本列島に流入したとする説があり、有力な朝鮮半島経由説と対立している。

● 考古学的に江南ルートの存在を主張してきた

樋口隆康・奈良県立橿原考古学研究所長の話

長江流域は人類学では手が付けられていなかった。渡来系弥生人に似ているならば彼らが弥生文化を持ってきたと言っていい。

弥生文化が来た道はいろんな道があったことを示す育力な資料だ。

２．　日本人のルーツと Iron Road　の接点を求めて

『弥生人の源流を探る　=西から東へ=』

-　　-土井が浜シンポジュウムの周辺で-

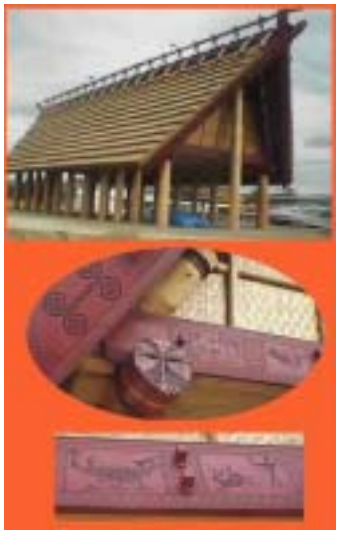
日本人のルーツ

渡来系弥生人の源流を求めて

―大陸から日本海を渡る『渡来人の道　鉄の道』を考える　―

roots1.htm　　１９９９．４．24.

昨日　弥生時代の大集落・大型建物の列柱の出た大阪府池上曽根遺跡の大型建造物の完成を記念して隣接の大阪府立弥生文化博物館で開催中の『 渡来人登場 － 弥生文化を開いた人々 --』展を見 に行った。大阪から和歌山へのバイパス国道 26 号線沿いの和泉市と泉大津市の境の市街地に新たに復元された巨大な列柱を並べた建物と広い遺跡に隣接して弥生博物館が建っていた。
東には河内から大和へ続く山々が見え、渡来人の郷　河内飛鳥がすぐ近くここも間違いなく渡来人の足跡が感じられる。



大阪府池上曽根弥生遺跡に復元された大型建造物

弥生特有の線描　船と狩猟　　船の舳先に鵜が見える

このページを気にかかっているインターネット　ホームページ『IRON ROAD ・たたら』の「大陸との交流」のページを進めるきっかけにしようと思う。

- ◆ 300 体を超える渡来人が望郷の念を抱いて日本海のかなたの大陸を眺めながら整然と並んで眠る山口県響灘の土井が浜の海岸丘遺跡。
- ◆ 出雲の国に入り、ヤマタノオロチを退治したスサノウノミコトは戦乱の朝鮮半島の小国の王子。鉄を持って日本に逃れてきたと言う。
- ◆ 邪馬台国の所在地は北九州・畿内???
- ◆ 日本海側や瀬戸内沿いにヤマトに向かって点々と続く金属器と稲作集落の弥生の遺跡・古代王国の連環。

などなど。

紀元前１世紀から３世紀にかけて中国・朝鮮半島の戦乱の世に戦乱を逃れ、多くの渡来人が日本へやって来たという。
大陸から九州・西日本に続くこの道は渡来人と一緒に歩んだ『稲の道』『鉄の道』『大和・日本成立の東遷の道』。
その黎明には大陸からやって来た幾多の渡来人一族の群れがこの道をと通っていった。
さして、弥生人の子孫が渡来人達の技術・技能を借り、それらを融合して築いた大和の国。
稲作を伝え、金属器を伝え、集落を作り、国へと発展し、日本の骨格が出来ていったと言われている。

昨年　土井が浜人類学ミュージアムで『土井が浜人のルーツ・日本のルーツ』の資料を貰った。
これらを手がかりに渡来人の道　「鉄の道」を考えてみたい。
３月に娘のいる米子訪問を機に「和鉄・渡来の民が色濃く足跡を残す古代王国の地」である奥出雲・伯耆の国を訪ねた。

・日野川・斐伊川の流れとたたら衆の守り神金屋子神社。
・スサノオ神話の鳥上の峯〔船通山〕とヤマタノオロチ。
・司馬亮太郎著『街道を行く:安芸の道』で読んだ
「石見風土記の丘・江の川と三次盆地渡来人とたたら」

曽根池上遺跡に併設された大阪府立弥生文化博物館で開催されている「渡来人登場　-弥生文化を開いた人々」展 を見つつ、また、曽根池上弥生遺跡の中に立ち、バラバラではあるが次々と古代ロマンの膨らむ一日でした。

ちょうど朝日新聞に日本渡来人のルーツが黄河流域のみならず揚子江の中流も考えられるとの日中共同研究の記事。 中国大陸の文化の伝播が川沿いの南北のみならず両者を繋ぐ東西にも広がっていったと伝えている。
土井が浜　人類学ミュージアムの「土井が浜人　ルーツ研究」の資料にも同じ事をみた。

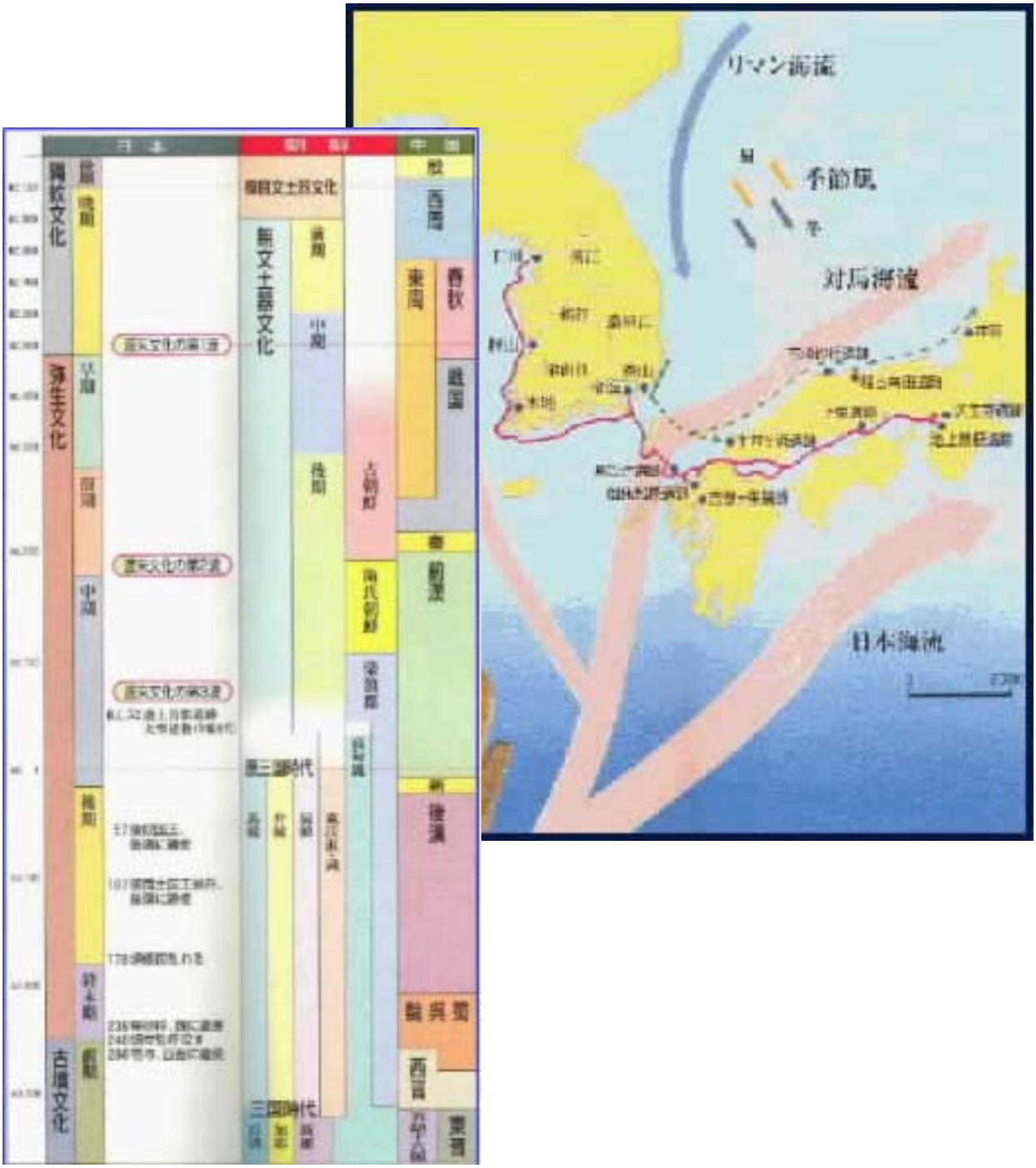
1999．4．24．神戸にて　中西

【 参 考 】

弥生時代の東アジア史年表　<日本・朝鮮・中国>

弥生　日本の起源黎明期　大陸環境と渡来人

朝鮮から日本への推定航路 & 弥生時代の東アジア年表



日本人のルーツ と Iron Load の接点を探して

3. 『弥生人の源流は大陸のどこまでさかのぼれるか』

第 6 回　土井が浜シンポジュウム

『弥生人の源流を探る-西から東へ-』

ーシンポジューム開会挨拶より転記-

土井が浜遺跡・人類学ミュージアム　松下孝幸館長

1998.8.30. 土井が浜人類学ミュージアムにて

roots2print.htm　1999. 5. 4. by M..Nakanishi 収録

【松下孝幸館長基調 Review】

『 弥生人の源流を探る － 西から東へ －　要 約 』

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　館長　松下孝幸

1998.8.30.　第 6 回土井が浜シンポジュームにて

『土井ヶ浜シンポジウム』は、人類学ミューシアムの活動の大きな柱で人類学的成果と考古学的成果などを広く普及し、その成果を分ちあうことを目的として、学際的に行なっているシンポジウムです。今年は第６回目になリ、また日中共同シンポジュームの 5 回目となりました。

- 1993 年 第 1 回 テーマ
  「弥生人は海をかけて南北に交流したか」
- 1994 年～1996 年 第 2,3,4 回テーマ
  「北部九州・山口と中国山東省のヒトと文化」
  (中国山東省の考古学者と中国の人類学者との共同討論)

1994 年から、人類学ミュージアムは中国山東省の考古学者や中国の人類学者と共同で、土井ヶ浜弥生人などの渡来系弥生人のルーヅを明らかにする調査と研究を行なったので、その成果を普及するためのシンポジウムでした。
この共同研究によって北部九州・山口の弥生人のルーツ（おおもと大陸にあると考えても よさそうです。また、土井ヶ浜弥生人の形質的特徴は、山東省での調査の結果、周代までは確実にさかのぼれることがわかリました。この結果を踏まえて、今後の次ぎの課題を解決するための調査研究を行って行こうと考えています。

① 直接の渡来地はどこか、
② 形質的超源はどこまでさかのぽれるか・そしてそれはどこの地域か、

大陸の文化と人骨をみていると、南北間の流れぱかリでなく、東西間の動きもあるようでこれも軽視できません。
「黄河と長江の二大河川に沿ってヒトと文化が西から東へ移動した可能性があるのではないか」と考え、両河川の源流がある青海省から出土した古人骨を、1997 年から 1999 年まて青海省と共同で 研究し、弥生人の源流を深ってみたいと思います。

【 渡来系弥生人　と　縄文人をルーツとする弥生人の特徴 】

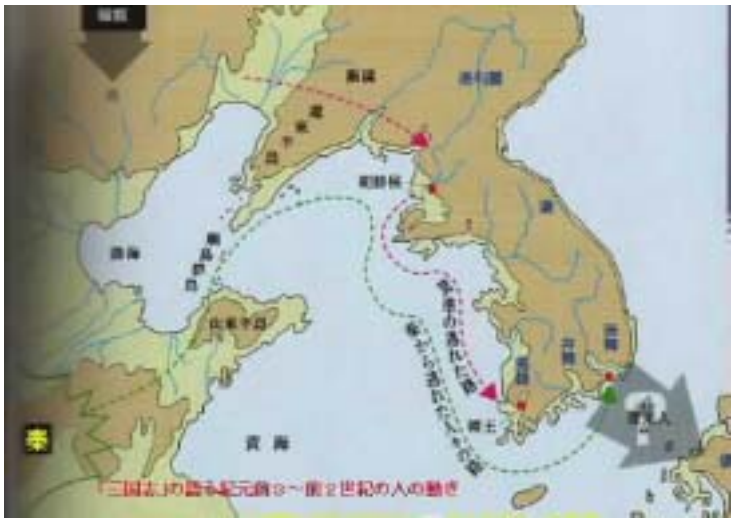
渡来系弥生人
北九州・山口タイプ
土井ヶ浜人
【弥生中期】

縄文人系弥生人
西北部・南九州タイプ
佐賀県詫田西分遺跡
【弥生中期】

縄文人
長崎県脇岬遺跡
【縄文後期】

【西日本の主な弥生人　人骨出土地と渡来人のルート】

「渡来人登場　ー　弥生文化を開いた人々　-」展資料より　１９９９．４．２２



【渡来系弥生人と縄文人をルーツとする弥生人の特徴】

4.　古代日本と中国や朝鮮の交流と鉄の伝来

gaya1print.htm

弥生時代　日本と中国・朝鮮半島との間には化ぱ都な交流があり、これらの交流・日本への渡来を通じて日本・日本人のルーツである弥生文化・弥生人が成立した。
弥生時代の農耕文化を支えた農耕器具や日本成立への戦乱を乗り切る武器として『鉄器の 伝来』もこれらの交流を通じてもたらされ、『たたら』製鉄として昭和の世まで約 2000 年の長きに渡り、連綿と日本を支えてきた。
この弥生・古墳時代の鉄器・製鉄技術の伝来についての記述について、思いつくまま調べている。

1999. 5. 2.　神戸にて　M..Nakanishi

中国ではすでに紀元前 5 世紀には鉄器文化が花開いており、戦乱・民族の移動交流を通じて四方に広がっていった。 春秋戦国時代以来中国で繰り返された戦乱が朝鮮半島に作用し、日本にも渡来の民を通じて影響し、この過程で日本にも鉄器が伝えられたと考えられます。

「三国志」魏志韓伝によると紀元前 2，3 世紀中国の政策や動乱の影響を受け、朝鮮半島の社会や政治が移り変り、大勢の人々が移動・移住したと伝えている。
朝鮮北部から陸路ばかりでなく、山東半島・遼東半島周辺の朝鮮半島西岸ばかりでなく、朝鮮海峡を渡り、日本にも集団で渡った民がいたこと想像され、日本と中国・朝鮮半島の交流が活発にあったと考えられている。
また、魏志韓伝にはこの紀元前 2,3 世紀から紀元 1 世紀にかけて、「弁辰の国は鉄を産し、韓・(ワイ)倭　皆がそれを求めてくる」と記している。そして、大和朝廷の成立する３世紀には南朝鮮の弁韓・辰韓地方から鉄の王国伽耶諸国が成立し、これら諸国と日本との活発な交流を通して、鉄製品の輸入・本格的な製鉄技術の移入が始まり、『大和の国・日本』の成立に大きな影響を与えた。

日本書紀によれば、出雲国でヤマタのオロチを退治したスサノウノミコトはこの戦乱の南朝鮮からの渡来した集団の長と伝えている。
司悠司は小説『覇王スサノオ伝説』でこのスサノウを伽耶国の王子として製鉄技術を持って先に渡来していた集団(ヤマタノオロチ)を滅ぼし、さらに次
々と土着豪族を斬り従えて出雲・大和を平定し、ついには日本統一をはたす大ロマンを小説に書き上げている。
真偽は別にして、当時の日本と朝鮮諸国との交流・鉄の役割等を生き生きと

小説に仕上げている。
朝鮮とのかかわりは人・文化・鉄のみならず　言葉・文字に至るまで想像を広げればいくらでも広がって行く。万葉集も古来朝鮮のことばとして解釈すると非常に理解しやすいとも聞く。
史実とはかけ離れているかも知れないが『たたら』を key　ward に時代をみると古代のみならず、実にスケールの大きなロマンを秘めている。今は山奥の奥の奥の谷あいのどん尽きにあるなにもない『たたら』遺跡に立ってその時代時代について色々想像をめぐらすのも楽しい。
それは何も古代に限らない。

1999.　5　.2.夜　　神戸自宅にて　　中西睦夫

****

表　古代日本と中国・朝鮮の交流と鉄の役割

奥出雲横田町　ホームページ資料より)

西　暦	和　暦	時　代	内　　容
ＢＣ600		縄 文	インドやエジプトで鉄器文化隆盛
ＢＣ500		弥 生	中国で鉄器文化隆盛
ＢＣ 27		弥 生	天日槍命　鉄器類を天界に献上する（日本書紀）
57	建武中元 2		国使節が後漢に行き金印を授かる
239	景初 3		卑弥呼が魏に朝貢し「親魏倭奴国王」の称号を授かる
252			済の使節が鉄器財宝類を大和朝廷に献上する
324		大和・古墳	高麗より鉄楯・鉄的が大和朝廷に献上される
538			仏教伝来
593			聖徳太子摂政になる
645	大化１年	飛 鳥	大化の改新
670	天智 9 年		水確により鉄を冶す
687	持統 1 年		新羅より大和朝廷に金・銀・鉄が献上される。
659	斎明 5 年		出雲大社造営さる
701	大宝 1 年	奈 良	大宝律令制定この頃、備後八郡の調（税金）として「麻布・鍬・鉄」が収められている
733	天平 5 年		出雲国風土記が撰せられる この頃、既に奥出雲仁多郡に製鉄あり
794	延暦 13 年	平 安	恒武天皇、都を平安京に移す以後明治維新まで都となる
800 頃			この頃、刀剣鍛冶技術が確立。名刀が多く造られる。 中国地方の租税（調）は鉄・鍬が中心となる

● 参考資料　1

佐古和枝氏　「海を渡ってきた人々」より

渡来人のもたらした鉄

絵で見る考古学

鉄 器 の 伝 来　と　渡 来 人

日本列島に稲作の文化がもたらされてしばらくたったころ、青銅器と鉄器がほとんど同時に日本に入ってきたと思われます。 鉄よりやわらかい青銅器は、細かな模様や形を鋳出した祭の道具になりましたが、銅よりも硬鉄器は、実際に切ったり削ったりする道具として用いられました。
日本の弥生時代と同じころ、朝鮮半島の南部の伽耶地方では鉄器の文化が栄え、日本列島にも鉄がたくさんもたらせられたようです。
でも錆びたとき銅よりも残りにくい鉄は、発掘調査をしてもなかなか見つかりません。
地中で腐ってしまいやすいというだけでなく、実際に使う道具として利用価値が高かったので、何度も砥石で研ぎ直して、使いづらいほど小さくなるまで使ったために残りにくいのかもしれません

● 参考資料　　朝鮮　三国時代　伽耶の鉄

鉄の古代王国　　伽耶国の精巧な鉄製品【５世紀】

日本等との交易に用いられた鉄てい

鉄製の甲冑

鉄製の武具と馬飾り

よみがえるる古代王国　『伽耶文化展』より
於　京都国立博物館　1992.8.28.

---

by M.Nakanishi 1999.5.4.　第１版

● たたら吹き製鉄

日本書紀伝承による 1～2 世紀頃の日本

5.『ヤマタノオロチを退治したスサノオノミコト』

susano1print.htm　1999.5.3.

1～2 世紀の日本は統一の前夜　多くの国に分かれ戦乱が続いていた。
中国・朝鮮半島においても戦乱が続き百済・伽耶・新羅等の国々が覇権を争い、
それらの戦乱をのがれ、朝鮮海峡を渡り日本へ来る渡来人集団も少なくなかった。

―　1999.5.3. M.Nakanishi　記

日本書紀・後漢書　倭伝　の伝承記述

スサノウノミコトが舞い降りたという鳥上の峯　(船通山)

●　「日本書紀」の伝承

「一書に口はく、素嚢鳴尊、その子五十猛神を帥ゐて、新羅国に降到りまして、曾戸茂梨の處に居します。　すなわち興言して日はく、「この地は吾居らまく欲せじ」とのたまひて、遂に埴土を以て舟に作りて、乗りて東に渡りて、出雲国の簸川上に所在る烏上の峯に到る　　」

ある書にいわく、
スサノオの尊は、その子供のイタケルの神を連れてソシモリというところに住んだ。
しかし、スサノオの尊は、「わたしはこの地には居たくないと思う」とおっしゃって埴土で舟を作り、それに乗って東に渡り、出雲の国斐伊川の川上にある烏上の峯に至った。

―『日本書紀』よりー

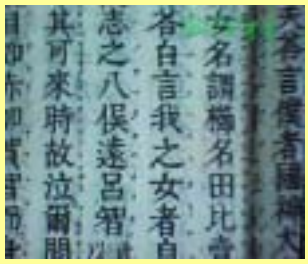
● 「後漢書」倭伝の記述

「 桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主なし 」
後漢の桓帝・霊帝の在位の期間、倭国は大いに乱れて
互いに攻め合い何年もの間主がなかった。
―『後漢書 倭伝』より―

奥出雲国　簸 川〔斐 伊 川〕の 流れ　と　ヤマタノオロチ

『八俣の大蛇』は蛇行する『斐伊川』ともこの川の上流域で行われた『たたら』衆および『たたら炉』から流れ出る『溶銑』の象徴とも言われる。
また　船通山のふもと鳥上では、今も技術伝承を兼ねた『たたら吹き』製鉄が行われ、刀剣の材料として、得られた『玉鋼』が全国の刀匠たちに配られている。(日刀保たたら)

やまたの大蛇退治と草薙の剣　――　日本書紀の伝承



「期に至りて大蛇あり。頭尾各八岐あり。眼は赤酸醤のごとし。松柏、背上に生ひて、八丘八谷の蔓延れり。酒を得るに及至りて、頭を各一の槽におとしいれて飲む。酔びて睡る。
時に素婁鳴尊、すなわち所帯かせる十握剣を抜きて、寸にその蛇を斬る。尾に至りて剣の刃少しき欠けぬ。故、その尾を割裂きて視せば、中に一の剣あり。所謂草薙剣なり」
その時刻になって、ヤマタノオロチがやって来た。 オロチの頭と尾はそれぞれ八俣に分かれており、眼は赤ほうずきのよう であった。背中には松や柏がぴっしりと生え、多くの丘や谷にまで広がっていた。 酒を見つけると、頭をそれぞれ八つの桶に突っ込んで飲み、酔って眠ってしまった。
そのとき、スサノオの尊は、腰にさしていた十握の剣を抜いてオロチをズタズタに斬り殺した。
オロチの尾を斬ったとき、剣の刃が少し欠けたため、その尾を裂いて見てみると、中に一振りの剣があった。 これが草薙の剣である。

『日本書紀』より

６．　出雲と朝鮮・新羅との関係

－　日本誕生とたたら 歴史雑感　－

susaprint.htm

新羅の前身である弁・辰韓にふ れた「魏志東夷伝」に「国から鉄が出、倭などみな随ってこれを取る」という記 述がある。
この事は古代朝鮮に製鉄技術があり、それを日本の前身であ る倭からも取りに行くなどの交流があったことを示している。
また、その後の日本誕生にかかわる出雲スサノオ伝説とも絡み、非常に興味深い。
そのほか新羅王の冠の飾りに出雲が主生産地としてよく知られていた勾玉が使用されていることも興味深い 。

出雲スサノオ伝説

当時　朝鮮半島では部族・民族間の戦い繰広げられ、難を逃れた多くの人たちが渡来人として日本にやってきた。
スサノオノミコトもその一人で新羅系の人たちと共に日本に逃れ、出雲に来て、すでにやってきて、農耕の民と争っていた先住のたたらの民を討ち、国を治め出雲の王となった。その後、 百済系の人たちの大和朝廷に国を譲った。
スサノオノミ コトが鉄を目指して朝鮮半島　当時の新羅から日本にやって来たともいわれている。

出雲人の祖先は一体どこから来たのであろうか？
出雲は新羅から船を迎日湾に浮かべると海流によってたどり 着くことの出来る場所である。
当時から大勢の移民が出雲に流れ着いたか、意図 的に渡来していたと考えられる。
一方出雲と対峙していた大和朝廷は百済系と言われており、「記紀」等の記述から、出雲を新羅系と認識していたと考えられている。 出雲では砂鉄が取れ、縄文時代の中期頃からすで に素朴な鉄生産が行われていたという記述もある。 倭から弁・辰韓に鉄を取りに 行った人々の情報の中に出雲の鉄のことが含まれていたとしてもあながち妄想で はなかろう。

（慶州：天馬塚にある天馬図）
崇高な文化をこれ一枚で感じることができる

よみがえる古代鉄の王国
伽耶王国展より　1992.8.9.

「日本人のルーツと Iron Road」の接点を求めて

『弥生人の源流を探る　=西から東へ=』

【完】